

証言 Episode 2

一関の戦争

特攻隊の基地や地上戦の歴史があったわけではない一関。しかし、多くの若者たちが出兵し、4606人が命を落としました。終戦5日前の空襲では、少年少女を含む35人が犠牲に。ここ、一関もまぎれもなく戦地だったのです。



写真はすべて吉田克子さん提供

記憶を後世に帰還した兄の葛藤



吉田克子さん
舞川・70歳

兄・耕吾は結婚して間もなく、激戦地・フィリピンへ。義姉・千代子は、毎日「八幡神社」へ通って武運長久を祈ったそうです。その願いがかない、1947年に兄は生還を果たしました。兄が舞川公民館長の時、3年の歳月をかけて「舞川戦史山桜頭彰記」を発刊。晩年も、戦争の記憶を残そうと、原稿用紙に記憶を綴っていました。しかし、1992年、病床に伏せて帰らぬ人に。享年74歳でした。翌年、義姉が遺志を継ぎ、兄の手記をまとめた「我が比島戦記・敵中横断五百軒」を発刊しました。家庭では、あまり戦争の話をしなかった兄。戦地の状況を知る生存者として、責任を感じていたのかもしれませんが、帰還後も、さまざまな葛藤の中で生きてきたんだと思います。



A. 出兵前に撮影された家族写真 / B. 25歳頃の耕吾さん / C. 耕吾さん、千代子さん夫妻

戦争の波は一関にも

1945年の終戦まで、軍隊へ多くの若者たちが召集されました。一関も例外ではなく、2万4千人以上が出兵。若者たちは祖国のためと信じ、古里を離れました。戦場では、想像を絶する激しい戦闘、飢えや伝染病などが兵士を襲いました。戦没者は4606人。その多くは、未来ある若者たちでした。これから青春を謳歌し、時に悩んだり、迷ったりしながら歩むはずだった人生。その人生を戦争が奪ったのです。

戦争末期になると、遺骨や遺品の回収は困難に。遺族には、木札や石が入った骨箱が届けられました。遺族は、遺骨を腕に抱くこともできず、ただ深い悲しみに暮れました。一方、生存者の一人、陸軍大尉の故・吉田耕吾さん（舞川）らは、81年に「舞川戦史山桜頭彰記（同発刊委員会発行）を発刊しました。舞川地区出身の将兵など約700人の出生、来歴、戦死（復員）の記録が収められています。この中で、吉田さんは「われわれはある時代に国を挙げて戦い、多くの尊い犠牲者を出したことを、

後世に伝える義務がある」と語っています。生存者だけが知る「目の前で起こった惨劇」や「戦友の死」。生き残った人たちは、そのつらい記憶と共に生き、向き合わなければなりません。特攻隊の基地や地上戦の歴史があったわけではない一関。戦争は、縁遠いものと感じている人も多いかもしれませんが、戦争がありました。祖国のため、家族のため、わが子の未来のため。遠い異国の地で、命をかけて戦ったたくさんの人たちがいたのです。

陸海軍別身分別死没者数（一関市分を抜粋）

地域	陸軍			海軍			合計
	軍人	その他	計	軍人	その他	計	
一関	947	45	992	233	50	283	1,275
花泉	470	17	487	119	25	144	631
大東	618	22	640	152	32	184	824
千厩	359	15	374	73	21	94	468
東山	240	7	247	54	10	64	311
室根	248	7	255	44	19	63	318
川崎	183	8	191	42	5	47	238
藤沢	379	31	410	114	17	131	541
合計	3,444	152	3,596	831	179	1,010	4,606

※参考文献：若手県「慰霊の旅」、「援護の記録」

36人の命を奪った空襲

8月9日、国鉄一ノ関駅の職員が構内で一枚のピラを拾いました。米軍機が落としたピラで、内容は「翌10日に一関を空襲する。避難せよ」というものでした。

10日午前8時頃、駅長は71人が乗った大船渡線の列車を、定刻よりも早く出発させました。30分後、予告通りに米軍機が飛来。駅を目がけた空襲で、投下された爆弾は4発。駅前広場に落下した爆弾は、3人の命を奪いました。機関車をね

らった爆弾は、貨物線の防空壕の中央に落下。防空壕は崩れ、避難していた33人中25人が亡くなりました。駅の空襲と前後して米軍機は、山目国民学校（現在の齊藤三郎さんが発行した絵本の題材）を空襲。兵士1人と付近の住民2人が犠牲になりました。平泉駅や花泉駅の周辺でも、機銃掃射や焼夷弾による攻撃が。前日には、旧室根村で機銃掃射があり、1人が亡くなりました。71人の乗客は難を免れたものの、空襲による犠牲者は36人。終戦5日前、この地もついに戦場と化しました。

齊藤三郎さんが発行した絵本。取材に基づき、一関空襲について詳細に描かれている。1993年発行。



平和の碑

空襲による犠牲者の冥福と平和を願って建てられた。建立：1990年12月8日 場所：一関文化センター 建立者：建立実行委員会

戦時中のつらい記憶に比べれば何でも耐えられた



佐藤常司さん
十二神・87歳

当時、水沢農学校に通っていました。一関に向かう汽車の中で、空襲警報が鳴ったことがあります。汽車は緊急停止し、乗客は皆外へ。警報がやむまで、田んぼに体をうずめました。また、駅で警報が鳴った時は、防空壕に入れず、外でグラマン機を眺めたこともあります。戦時中は、いつだって死と隣り合わせでした。

空襲が激化し、友人と「空襲警報が鳴った日は、通学はやめよう」と約束しました。8月10日も朝から警報が。私たちは、運よく難を逃れました。駅前で空襲があったことを知った時は、身震いし「戦争もついにここまで来たか」と実感しました。

学校では、軍事教練が行われ「戦争一色」の日々。小柄の私には、銃はとても重く、大変な訓練でした。冬には、夜間行軍が。胴まで積もった雪の中を銃を担いで歩いたり、雪の上に伏せたまま3時間銃を構えたりしました。

あれから70年。あの時のつらい記憶に比べれば、どんなことだって耐えられました。

あの悲しみを忘れない。戦時中に起こったもう一つの悲劇 「ライオンの涙」

戦争の激化に伴い、空襲や食糧不足を懸念して大型獣の殺処分が全国的に行われました。1944年、市内で興行中の「黒須曲馬団」のライオンを処分するよう、警察から指示がありました。ライオンは親子4頭。曲馬団の人気者で、団員にとっては家族も同然でした。

軍は、大勢の前での射殺を命じました。当時は、毒殺や餓死が一般的。市民の戦意を鼓舞するために命じたのです。5月6日、ライオンは猟友会によって射殺されます。その時、ライオンは涙を流したといわれています。戦争のために殺されたライオンを供養するため、77年5月6日に猟友会は山目・圓満寺に「来恩塚」を建立しました。墓前には、花や線香が供えられています。

齊藤三郎さんは、この悲劇を忘れまいと2003年に絵本「ライオンの涙」を発行。ライオンの悲劇や一関空襲について、描かれています。戦争学習の教材として、県内の児童・生徒らに読まれています。



絵本「ライオンの涙」



絵本「ライオンの涙」を発行した 齊藤三郎さん 72歳・山目町

子供たちの教科書に、一関の戦争のことは書かれていません。子供たちに「何ができるか」を考えてほしくて、当時を知る人々取材したり、資料で調べたりしました。1993年に絵本「一関空襲」を発行。10年後に「ライオンの涙」を発行しました。戦争は、動物までも傷つけます。多くの子供たちに古里で起こった戦争を知ってほしい。



来恩塚

殺されたライオン4頭の骨が埋められている。建立：1977年5月6日 場所：圓満寺（山目館6） 建立者：一関市猟友会

※参考文献：金野清治郎「証言・一関空襲」、加藤昭雄「あなたの町で戦争があった」